

福井市農業委員会 農業委員の応募者				自薦による応募	【中間公表】	※五十音順で掲載		
氏名	性別	年齢(歳) R8. 7. 20 時点	職業	経歴	農業経営 の状況	応募理由	抱負など	認定農業者等 に該当するか 否かの別
小寺 清憲	男	69	農業	・ S56. 4～R2. 3 福井県経済農業協同組合連 合会次長 ・ H25. 1～R3. 12 芝原水土地改良区委員 ・ R2. 11～現在 鳴鹿土地改良区総代	水稻	家業として、農業特に稲作を行って来て、代々就農 に携わっています。 仕事も農業団体に長年勤務し退職しましたが、今後 も農業に関する事に深く携わりたいと思い、地域の農 業振興、発展、衰退防止に貢献したいと感じます。	地域農地での今後の衰退を防ぐ為に、集約化や遊休農地の防止、活 用等に尽力を尽くしたい。	非該当
廣瀬 直之	男	62	農業	・ 子供の頃から自営の農業に従事	水稻 野菜	私の家は親の代から兼業農家で子供のころから米作 りの手伝いを行ってきました。 親が亡くなってからも続けており、会社を辞めてか らはほぼ専業農家になっております。 しかし将来の事（後継者・担い手）を思うと不安が あります。 新聞等で得られる情報以外の農家の実態をこの委員 になる事で得られると思い応募します。	この委員を通して得られた生の情報等を参考に、農家及びその担い 手の将来を考えた農地政策（集約・集積化、遊休農地の解消）に協力 したいと考えます。	非該当
堀内 浩徳	男	64	農業	・ 主計土地改良区 H28. 4～R2. 3 理事 R2. 4～R6. 3 筆頭理事 ・ R2. 2～現在 株式会社堀内農産代表取締役 役社長 ・ R2. 7～R5. 7 福井市農地利用最適化推進 委員 ・ R5. 7～現在 福井市農業委員	水稻	地元を中心に農業を行っている為	大規模経営による農業生産力の増進を図り、農業者の経済的地位を 向上させたい。	該当
和田 敬信	男	67	無職	・ 福井県庁 H24. 4 産業労働部商業・サービス業振 興課長 H26. 4 国体推進局企画幹 H29. 4 福井健康福祉センター所長 ・ R1. 6 一般社団法人福井県産業廃棄物処 理センター理事長 ・ R3. 4～R7. 3 公益財団法人ふくい産業支 援センター常務理事	無	私は、福井市和田中町の専業農家の次男として生ま れ、子供の頃から農業の手伝いをしてきました。 今も、跡を継いだ兄を手伝い、農繁期に、年１０日 ほど、一緒に農業に関わっております。 その中で、集落における農業の担い手が年々減っ ており、それに伴い、農地が荒れてきていること、特に、 障害のある長男と一緒に、周辺農地の散歩を日課とし ているので、昔と違って草刈りや水の管理が十分でな い農地が増えていること等も理解しています。 また、兄の確定申告も手伝っていることから、農業 所得が、肥料、資材等の高騰により、非常に厳しい状 況になっていることなど、最近の農業を取り巻く環境 についても、ある程度理解していると思います。 また、私の町内（問屋南町内会）でも、最近、農地 との境界付近の雑草や、排水、遊休農地をめぐる環境 面の悪化など、農地をめぐる地域住民との関係も難し くなってきております。 私を育ててくれた農業の現状に危機意識を持つとと もに、農地を守り、国民の食を守る最も基本的な産業 である農地の振興を図るため、県庁で主に商工部門で 培った経験や「ふくい産業支援センター」での経験も 活かし、少しでも貢献できればと考え、今回、応募す ることとしました。	私は、委員として、担い手への農地集積や遊休農地の解消など農地 利用の最適化を図るため、取り組んでいきたいと考えています。 また、次の３点について、私なりに取り組み、少しでも貢献できれ ばと考えています。 ①農業所得の向上 農地を守り、農業を振興していくためには、農業で生活できる持続 可能な仕組み作りが不可欠です。 県庁や「ふくい産業支援センター」での経験を踏まえ、「農地中間 管理事業」を活用した農地の集約化によるコスト削減や、付加価値を 上げるためのブランド米や有機米の栽培のほか、例えば特産野菜の栽 培、観光農業の推進など農業所得の向上に少しでも寄与できればと考 えています。 ②担い手の確保と新規就農の支援 農業の担い手不足が進む中、一方で、新たな活動の場を求める福祉 サイドとマッチングする農福連携は、農業を振興する上でも、注目す べき取り組みと考えています。 私は、「一般社団法人福井県まちづくりセンター」の理事（無報酬、 非常勤）として、農福連携の取り組みを支援した経験もあり、これら の経験を活かして、担い手の確保や新規就農の支援ができればと考 えています。 ③児童・生徒への農業の魅力の発信 今後、農業を発展させていくためには、将来の担い手となる今の子 供たちに農業に関心を持ってもらうことが必要不可欠です。 そのため、児童生徒を対象に、農業の魅力を発信し、子供の時から 農業に慣れ親しむ環境を学校とも連携して築いていければと考えて います。	非該当